

資 料

# 成育看護の視点から子どもの今と未来を考える —北海道成育看護研究会 第12回成育看護研究会を終えて—

Considering the present and the future of child from the viewpoint  
of developmental nursing

-After 12<sup>th</sup> Society of Developmental Nursing Hokkaido-

細野恵子

Keiko HOSONO

保健福祉学部保健看護学科

キーワード：小児看護，母性看護，成育看護

## はじめに

平成29年9月16日(土)、旭川大学保健福祉学部保健看護学科において、第12回北海道成育看護研究会が開催された。道北地区での開催は10年振りのことであった。研究会参加者数は75名(会員27名、非会員36名、学生12名)にのぼり、予想を上回る多くの方々のご参加をいただいた。参加者割合を居住地でみていくと、当然のことながら旭川が8割を占め、それ以外の地域が2割(札幌16%・北見4%)という比率であった。ここ数年は札幌での開催が続き、参加者数は30～50名前後であったことから、地方都市における開催としては多くの方々の参加を得ることができた。また、最後まで活発な意見交換の場がみられ、盛会な雰囲気の中かで終えられたことを振り返ると、多くの方々のお力に支えられたことに感謝の意を表したい。

本稿では、第12回北海道成育看護研究会(以下、本研究会とする)の開催を通して、大会長の立場から北海道成育看護研究会の歴史、本研究会の概要を述べるとともに、その成果を報告する(写真1)。

### 1. 北海道成育看護研究会の歴史

北海道成育看護研究会は、日本赤十字北海道看護大学の小児看護学領域教授であった上野美代子先生の音頭により、平成17年9月4日に設立総会が開催され、

旭川医科大学医学部看護学科の小児看護学領域教授であった岡田洋子先生(現在、日本医療大学保健医療学部教授)を理事長として発足した研究会である。

本研究会は小児・母性看護学領域の関係職種を中心

【写真1】

とする看護系の学術団体であり、会員数は約200名を擁している。現在、主な会員は周産期看護・小児看護・母性看護・成育看護・地域看護に携わる看護実践者あるいは看護教育・看護研究に携わる看護職者、および教育・福祉・医療関係の専門職者の方々に構成される。本研究会の活動目的は、「人のライフサイクルを見通した包括的・継続的医療における看護である成育看護の考え方<sup>1-3)</sup>に立ち、成育看護の実践および教育・研究の進歩発展に寄与し、出生前・出生後のすべての小児とその家族、また、小児期からの健康障害が続いている成人期の人々、そして次世代の人々の、健康と幸せを実現すること」としている。その目的に基づく活動として、①研究集会の開催、②学術講演会の開催、③研究会誌の発行、④研究会ニュースの発行、⑤情報ネットワークの拡充などが挙げられている。

本研究会における第1回理事・評議員会は平成17年9月4日に北見市で開催され、理事5名（うち、理事長1名）・評議員5名の役員を選出し、会則が承認され、研究会発足の端を発した。同時に、研究集会の開催を次年度に開催することを予定し、第1回北海道成育看護研究会大会長には、研究会の立ち上げにご尽力された上野美代子先生が指名された。これ以降、年1回の割合で開催されてきた研究集会（学術講演会を含む）は今年度で第12回を迎えた。これまでの研究会開催地は北見市（2回）、旭川市（2回）、名寄市（1回）、札幌市（7回）の4市である。また、研究集会大会長には看護系大学の教員（教授）が携わり、毎年様々なテーマのもとに学術講演会やシンポジウム、交流集会、ワークショップなどが企画され、一般演題発表（ポ

スターセッション）も欠かすことなく開催されてきた（表1）。平成29年9月現在、本研究会の理事・評議員は16名体制（理事長1名含む）となり、地道な運営が継続されている。

## 2. 第12回北海道成育看護研究会の概要

本研究会のメインテーマは、「成育看護の視点から子どもの今と未来を考える」とした。本テーマは、超少子高齢社会を背景に看護の力が問われる社会状況において、子どもを取り巻く医療関係者に求められることは何かを問い、子ども達の未来に向かって医療関係者が社会の中で貢献できることを探る機会になることを意図して企画した。内容は基調講演・シンポジウム・一般演題発表（ポスターセッション）の3部構成とし、子ども達を取り巻く環境を見つめ直し、様々な視点から子ども達の笑顔につながるための改善を期待するプログラムとした。また、基調講演やシンポジウム、一般演題発表を通して、臨床実践家や基礎看護教育機関の関係者、地域の子ども達を支える関連職種の方々とともに、子ども達の明るい未来を願う質の高いケアの提供を検討したいと考えた。

基調講演は旭川大学学長の山内亮史先生を講師に迎え、1時間足らずのコンパクトな枠のなかで濃厚な内容のご講演をいただいた。講演のテーマは「“悲しい貧困”と“淋しい豊かさ”のなかに生きる子ども達」とし、子ども達を取り巻く世界に、いま何が起きているのか、現代の社会環境がもたらす子どもへの影響とは何かを問いかけるものであった。子どもを取り巻く環境は様々な社会の影響を受け、多くの問題を抱えてい

表1 北海道成育看護研究会 開催一覧

	会期	大会長	所属	会場	開催地
第1回	H18年9月6日	上野 美代子	日本赤十字北海道看護大学看護学科	日本赤十字北海道看護大学看護学科	北見市
第2回	H19年9月2日	岡田 洋子	旭川医科大学医学部看護学科	旭川医科大学医学部看護学科	旭川市
第3回	H20年9月7日	上野 美代子	名寄市立大学保健福祉学部看護学科	名寄市立大学保健福祉学部看護学科	名寄市
第4回	H21年9月6日	荃津 智子	天使大学看護栄養学部看護学科	天使大学看護栄養学部看護学科	札幌市
第5回	H22年9月6日	蝦名 美智子	札幌医科大学保健医療学部看護学科	札幌医科大学保健医療学部看護学科	札幌市
第6回	H23年10月15日	佐藤 洋子	北海道大学大学院保健科学研究所	札幌医科大学保健医療学部看護学科	札幌市
第7回	H24年10月13日	三国 久美	北海道医療大学看護福祉学部看護学科	札幌医科大学保健医療学部看護学科	札幌市
第8回	H25年10月12日	柳原 真知子	日本赤十字北海道看護大学看護学部看護学科	日本赤十字北海道看護大学看護学部看護学科	北見市
第9回	H26年10月4日	松浦 和代	札幌市立大学看護学部看護学科	札幌市立大学看護学部看護学科	札幌市
第10回	H27年10月10日	山本 八千代	北海道科学大学保健医療学部看護学科	北海道科学大学保健医療学部看護学科	札幌市
第11回	H28年10月8日	井上 由紀子	札幌保健医療大学保健医療学部看護学科	札幌保健医療大学保健医療学部看護学科	札幌市
第12回	H29年9月16日	細野 恵子	旭川大学保健福祉学部保健看護学科	旭川大学保健福祉学部保健看護学科	旭川市

(敬称略)



【写真 2】



【写真 3】

る。例えば、増加の一途を辿る子ども虐待、いじめ、不登校、ひきこもりなどはそのごく一部である。子どもの成育環境の課題を社会科学の視点で整理し、解決へのアプローチを探る実践に向けて、教育社会学の立場から具体的かつわかりやすくお話しいただいた（写真 2）。

シンポジウムは「周産期医療における多職種連携の現状と課題」をテーマに、6名の医療関係者をシンポジストとしてお招きし、ご報告いただいた。6名のシンポジストはいずれも旭川市内の医療施設で活躍する方々である。シンポジストには以下の順にリレー形式で進めていただいた。①白井勝氏（JA 北海道厚生連旭川厚生病院周産期母子医療センター NICU 医師）→②鈴木彩花氏（旭川医大附属病院周産母子センター産科病棟助産師）→③栗原かおる氏（旭川医大附属病院周産母子センター NICU 助産師／認定看護師）→④久保知美氏（JA 北海道厚生連旭川厚生病院総合相談センター助産師）→⑤宮本品恵氏（北海道立旭川肢体不自由児総合療育センター医師）→⑥佐藤雅子氏（旭川地域訪問看護ステーション看護師）。報告内容は、周産期医療に携わる医師の役割・看護職の役割、訪問看護ステーションにおける看護職の役割、各施設における多職種連携の現状と課題などであり、いずれも所属施設の特徴とその機能を具体的に示す内容であった。また、それぞれの立場における課題の提示もあり、多職種連携の重要性を痛感するものであった（写真 3～5）。

一般演題発表（ポスターセッション）は 12 演題の事前登録があった。発表当日は、母性看護学領域における調査研究 4 題、産科・NICU 領域における看護実践研究 2 題、小児看護領域における看護実践・調査研究 3 題、学童・思春期を対象とする実態調査研究 2 題の計 11 演題が発表された。ポスターセッションは 3 つのブースに分かれ、同時進行で行われた。会員の皆様



【写真 4】



【写真 5】

による研究成果の発表に対し、フロアの方々からの質問あるいは座長からの質問・意見交換などがあり、活発な交流の場となった（写真 6～8）。

### 3. 第 12 回研究会の成果と意義

山内亮史先生による基調講演を通して、子どもたちを取り巻く世界、生きる環境をどのように整えていくのか、我々おとなが一人ひとり考えていかなければいけないこと、その必要性をあらためて認識する機会になった。解決へのアプローチとは何か、どのような対



【写真 6】



【写真 7】



【写真 8】

応が求められているのかを考え、できることから取り組み組むことの決断と行動力が求められており、周囲の関係者との連携が重要であると考え。

シンポジウムでは、医師・看護師・助産師・認定看護師の立場から、それぞれの施設における医療現場の現状や多職種連携の実状と課題を報告していただき、旭川あるいは道北圏内の周産期医療の実態など、多くの情報を共有する有意義な機会となった。一方、参加されたフロアーの皆様との意見交換の時間をとる余裕がなくなったことが反省として挙げられる。筆者はもとより、参加された皆様も有意義な情報交換の場を期待していたことから、非常に残念な思いで終えたことに悔いが残る。本研究会で話し合われた課題をこの場で終わらせることなく、今後は、多職種連携の強みを発揮できる機会を検討していきたいと考える。また、駒松による成育看護の定義「ライフステージとライフサイクルを視野に入れてその“ひと”らしい生き方が支援できること」<sup>3)</sup>を念頭に、総合的かつ継続的に子どもとその家族を視野に入れた支援<sup>4)</sup>の検討が必要であろう。

一般演題発表では、参加した聴衆の皆様から多様な

視点での質問あるいはご意見が示され、研究発表の場にふさわしい質疑応答の場となった。貴重な情報交換をもとに、次への課題解決につなげられるよう研鑽の場となることを期待したい。

## おわりに

開設から10年目を迎える旭川大学保健福祉学部において、2回目となる看護系学術集会の開催(当番校)を経験することができた。1回目は平成27年7月に開催された日本看護研究学会第25回北海道地方会学術集会(大会長:泉澤真紀教授)であり、105名の参加者を得て成功裏に終わったことは記憶に新しい。日本看護研究学会北海道地方会は平成4年に発足し、道内に約300名の会員を擁し、看護の全領域をカバーし、学術団体としての歴史も長く規模も大きい。一方、本研究会は成育看護という領域に特化した特徴を有することから、参加者も限定されることが懸念された。しかし、参加された方々の反応から推測すると、多くの方々の興味・関心を刺激したのではないかと確信する。今後は、看護の実践者はもとより、看護教育を担う者たちも含め、若い世代の看護職者とともに共鳴しながら、多くの成果を発信していける場を重ねていくことを期待する。

## 謝 辞

最後に、第12回北海道成育看護研究会の運営にあたり、ご協力いただきました関係機関および旭川市内の企業の方々、基調講演者・シンポジスト・座長・研究発表者の皆様、参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。また、企画委員会のメンバーとして初期段階から参加いただいた山口さつき先生、岡田郁子先生、宮

崎剛司先生、能登由美子先生にはお忙しいなかご尽力をいただき、衷心より感謝申し上げます。さらに、実行委員会のメンバーである澤田みどり先生、佐藤慶如先生、伊東美穂先生にもお忙しいなかご協力いただき、深く感謝申し上げます。また、本研究会のフライヤーおよび研究会抄録のデザイン化において、特筆すべきご支援をいただいた寺田高宏氏にお礼申し上げます。

本研究会開催にあたり、旭川大学短期大学部の校舎および電子機器・機材の使用においては旭川大学事務局より特段のご配慮を賜り、本研究会の運営に多大な

ご支援とご協力をいただきました。この場をかりて、あらためて厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

- 1) 柳澤正義：成育医療の概念とその背景，小児看護，25 (12)，1567-1570，2002
- 2) 山元恵子，地蔵愛子，谷川睦子：成育医療における看護の役割，小児看護，25 (12)，1571-1577，2002
- 3) 駒松仁子：キャリアオーバーと成育医療，そして成育看護，小児看護，28 (9)，1070-1075，2005
- 4) 駒松仁子：小児慢性疾患のキャリアオーバーと成育看護の課題，国立看護大学校研究紀要，8 (1)，20-30，2009